

書評

『丸木俊 「原爆の図」を描き世界に戦争を伝える』

西山利佳 にしまりか

好きなことをあきらめない女性

あかね書房の小学生向き伝記シリーズ「伝記を読もう」の三〇巻目として、丸木俊の伝記が出ました。著者は岡村幸宣さんです。

物語は北海道の小さな村「秩父別」のお寺の壁に絵を描く、小学校入学前の女の子の姿から始まり「赤い屋根」のお寺の「白いかべ」、「かべからふすまへ」、そして「うかへ」描かれるたくさんの子どものたちの行列——視覚イメージが立ち上がるオープンングです。叱られた記憶がなく、「これはおまえが描いたのだよ、という絵の一部は、ずいぶん長いあいだ、かべに残されていました」



(p.8)と続くので、私はそこに、朗らかな多幸感のようなものを感じました。

物語は時系列に沿って進みます。平等を教えてくれた渡先生、貧困、母との別れ、旭川の女学校で出会った凶画の戸坂太郎先生、次第に開かれる絵の才能、困難を越えて進んだ東京の女子美術学校、家庭教師として渡ったモスクワの日々、「池袋モンパルナス」で始まる画家生活、失恋の痛みを癒やしに渡った「南洋諸島」での体験……。位里と出会うまでの人生に筆が割かれるのは全体の三分の一ほどです。しかし、好きなことを諦めない女の子(女性)の姿は、多くの子どもたちの共感を導くはず。当然といえば当然ですが、位里との出会い以降は、「原爆の図」が描かれる経緯と、展開が中心となります。俊の視点からわかりやすい文体で綴られており、子どもたちは、俊の体験、思考、そして認識の広がりを通して、「戦争」のさまざまな相を知ることになるでしょう。また、「戦

争になるかもしれない大事なことを、どうしていばった男の人だけで決めてしまうのでしょうか」(p.66)と考えるエピソードや、「女の人もひとりの人間として生きることができると時代の絵」(p.67)として描かれた《解放され行く人間性》など、「女絵描き」の人生は、ジェンダーギャップ指数でまたも順位を落とした私たちの国の有り様を省みさせます。

「わたしたちの絵」の根源

もう一点、本書から受けとったのは、「原爆の図」も、原爆の図丸木美術館も「わたしたち」のものだということ。民主的な芸術の方法として「みんなでひとつの作品をつくる共同制作がはじまっていた」、俊と位里も「原爆という大事なテーマはふたりで一緒に描こうと考えました」(p.74)との一節に私ははっとしました。「原爆の図」が二人の作品であることは当たり前の前提で、なぜ共同制作しようとしたのか、そもそもその発想の根源を考えたことがなかったのです。また、次の一節にも目が開かれました。「あなたたちは、自分が描いたから自分たちの絵だと思ってるかもしれませんが、これはわたしたちの絵です」(p.78)

——一九五〇年の初めての展示会場

で一人の老人が語ったという言葉です。「原爆の図」は、生み出された経緯も、その表現が抱え込んでいるものも、展開の仕方、どの相でも、個を越えた「みんな」のものであるのだと、その社会性がじわじわと伝わってきました。

それは、最後の象徴的な場面によって、本作全体を覆う印象になっていると感じます。「ネタバレ」はしたくないので(伝記でネタバレを気遣わねばならないとは、思ったこともありません)、冒頭の場面と響き合せて、本書全体をおおらかに開かれた印象にしている気がします。その印象は、「原爆の図」を見るとき目の目にも作用してくると思われれます。次に美術館に行つたとき、私はきつと「みんな」を感じ、「わたしたち」としてそこに共に存在することを意識する様な予感がします。

さて、この伝記シリーズの企画・編集にあたった野上暁氏は、日本ペンクラブ「子どもの本」委員会の支柱となっているメンバーです。同委員会メンバーが執筆にあたった『阿波根昌鴻』(堀切リエ)、『中村哲』(濱野京子)も、丸木美術館に集うみなさんには、きつと共感を持ってお読みいただけると思います。

(児童文学評論家)